

2019 年度 わがまち魅力化プロジェクト
～サステイナブルな地域社会の創生事業～
事業報告書

2020 年 3 月

一般財団法人社会開発研究センター（SDRC）

一般財団法人日本総合研究所（JRI）

目 次

1. 本事業の目的と概要.....	1
(1) 本事業の背景と目的.....	1
(2) 本事業の経緯と概要.....	2
2. 山梨県市川三郷町でのフィールドワーク.....	5
(1) 市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトの活動概要.....	5
(2) 実施内容.....	7
(3) 2019 年度プロジェクト企画における成果、今後に向けた課題.....	21
3. 全国的な情報ネットワーキングに向けて.....	25
(1) 東京大手町「3×3 Lab Future」を拠点とした全国との連携.....	25
(2) 地域金融機関や地域シンクタンクとの情報交換.....	26
4. 総括.....	30
(1) 3 年間の実践によって得られた関係性と知見.....	30
(2) ビジョン実現に向けて今後求められるアクション.....	31
参考資料 1. 「大学生が中心となった地方創生」参加者アンケート結果.....	29
参考資料 2. 市川高校アンケート結果.....	33

1. 本事業の目的と概要

(1) 本事業の背景と目的

現在、わが国において少子高齢化、人口減少が進む中で、特に地方ではその影響が大きく、過疎や産業の衰退等、住民の暮らしに直結する課題が山積している。一方で、各地域には魅力ある資源（自然、文化・伝統、工芸、農水産物、歴史等）が存在しているのも事実である。多様性豊かな地域を残していくためには、その地域の魅力を発掘し、磨き、それを伸ばしていくことが必要であり、それが地域の豊かさや幸福へとつながる。さらに、そのような地域の魅力を効果的に発信することで、その地域に目を向けてもらい、交流やインバウンドにもつながられる。各地域には、それらを実現するための地域資源のポテンシャルが存在している。

地域活性化や地方創生等、魅力ある地域づくりに向け、現在、日本各地で様々な取組が行われている。その多様な取組の中でも、地域課題の解決に導く一つ的手段として、「地域外」の視点や「若者」の視点の活用が注目されている。昨今、そのような活動に関わる地域外の若者（大学生等）も増えてきている。一方で、大学生等が地域課題の解決に取り組む上で、活動の継続性や組織的な支援などの課題も指摘され、また地域と大学や大学生との間を仲介するコーディネーター的な存在が不可欠との指摘もある。若者の発想と行動力を地方創生や地域の魅力化に資する力に変えていくためには、地域と若者のつなぎ役としてシンクタンクの役割も大きい。

そこで本事業では、複数年の事業期間を想定し、1年目（2017年度）の事業ステップとしては、関連する取組事例の情報収集を行い、さらに2016年より実践されている「日野町魅力化プロジェクト」*への参画を足掛かりに、日野町でのフィールドワーク等を通じて、持続可能な地域社会の創生に向けた取組のあり方、取組推進のためのプラットフォームのあり方等を検討してきた。それを踏まえ、2年目（2018年度）の事業では、「日野町魅力化プロジェクト」への継続的参画とともに、わがまち魅力化プロジェクトのパッケージ化の検討・試行、実践フィールド（地域）の拡大のための他地域へのヒアリング、プラットフォームの枠組みの検討を行った。3年目である2019年度は、他地域への展開を実践するとともに、活動の発展的・継続的な仕組みづくりのための関係機関との連携づくりを行った。

*日野町魅力化プロジェクト（わがまち魅力化プロジェクト）の概要

2016年から2018年まで鳥取県日野郡日野町において実施した、大学生によるまち歩きプロジェクト。プロジェクトの目的は、高齢化と過疎で悩む町をフィールドに、大学生がまち歩きや体験等を通じて、まちの課題や魅力を探ることである。

- 2016年、故・安田泰敏九段(囲碁棋士、元東京富士大学特任教授)が、地域おこし協力隊をハブとして大学生と町をつなぎ、双方の成長・発展につながるプロジェクトとして発案され始動。初年度は東京富士大学の企業ビジネス研究同好会の学生が中心に参加。

*安田泰敏九段は、2018年5月2日に逝去されました。

- 行政・地域（行政、地域おこし協力隊、町議会、事業者、地域住民等）と、都市と地方の学生（東京富士大学・鳥取大学・島根大学等）のコラボレーションにより実施。

- 2016年から2018年の3か年は鳥取県日野郡日野町、2019年度は新たに山梨県市川三郷町をフィールドとして実施。

(2) 本事業の経緯と概要

① 1年目事業の概要（成果、明らかになったことと今後の課題）

本事業は複数年の事業期間を想定し、初年度は調査研究活動として、以下の点について重点的に情報収集及び研究活動を行った。

（1年目事業の詳細は、「わがまち魅力化プロジェクト～サステイナブルな地域社会の創生事業（事業報告書）」（社会開発研究センター/日本総合研究所, 2018.3）参照。）

【1年目の事業「トライアル・情報収集期間」】

（i）全国事例の情報収集

魅力化プロジェクトに関連する学生によるまち歩き活動等、地域活性化に向けた取組事例や取組推進のプラットフォーム等の活動形態把握のために、情報収集・整理（先行事例研究）。

（ii）日野町でのフィールドワーク

「日野町魅力化プロジェクト」（学生によるまち歩き活動）への参画、事前・事後の現地での地域情報収集・整理（住民や地域おこし協力隊等の関係者へのヒアリング）、フィールドワークから得られた示唆のとりまとめ。

➤ “町民自らがこの地域のことを考え、実行すること”を前提に、「人づくり」「場づくり」「生業づくり」という観点から、今後の事業プランを町（行政）へ提案。

➤ 事業の基盤づくりに向けて、以下の3点を翌年度に向けた課題とした。

（i）フィールド拡大・取組の普及に向けたプロジェクトのプログラム化

（ii）フィールド拡大に向けた各地域へのヒアリング、交流

（iii）取組推進、事業継続性担保のためのプラットフォーム枠組み検討

② 2年目事業の概要

2年目事業については、「展開・開発期間」と位置づけ、実践活動については、日野町でのフィールドワークのプログラム化、パッケージ化の検討を進めるとともに、新たな実践フィールドの開拓に取り組んだ。さらに、取組推進のためのプラットフォームの構築に向けた枠組みの検討を行った。

（2年目事業の詳細は、「わがまち魅力化プロジェクト～サステイナブルな地域社会の創生事業（事業報告書）」（社会開発研究センター/日本総合研究所, 2019.3）参照。）

【2年目の事業「展開・開発期間」】

(i) 日野町でのフィールドワークのプログラム化

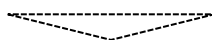
「わがまち魅力化プロジェクト」のパッケージ化も目指して、日野町をフィールドとして実施。参加学生がプロジェクトに目的意識と当事者意識をもって参画するための事前・事後の働きかけ（ワークショップ、アンケート等）をプログラム化。

(ii) 実践フィールドの拡大に向けた取組

「わがまち魅力化プロジェクト」の日野町以外の新たなフィールド開拓のため、複数の地域への訪問ヒアリング調査を実施。

(iii) プラットフォームの枠組み検討

取組推進のためのプラットフォームの枠組み（設立目的や役割、機能、連携先候補等）を検討。



➤ 参加学生に向けてプロジェクト前後においてフォローアップのためのワークショップ機会を設定。夏季休暇中のプロジェクトだけではなく、前後含めた年間のプログラムをパッケージ化した。参加者層を首都圏の大学生だけではなく、地元の高校生等も含める方針を検討したが、プログラム期間の調整が難しく実現には至らなかった。

➤ フィールド拡大のために、他地域へのヒアリングを実施。基本のプログラムパッケージをベースとしながら、各地域の特性・課題感やニーズに合わせてプログラムを提案することで、実現可能性が高くなることを確認した。

➤ プラットフォームの枠組み検討については、1年目事業から見てきた課題（①参加学生の確保、②新規・継続自治体の確保、③事務局機能の体制整備）について、シンクタンクが果たしうる機能を整理した。

①参加学生の確保

- 既存の連携大学・学識者とのパイプ強化、過去の参加大学生の組織化
- 地方創生関連の学部を有する大学等への新規アプローチ

②新規・継続自治体の確保

- 大学生や外部人材を活用している取組推進自治体への直接的アプローチ
- 同様の既存の全国事例（プラットフォーム）との連携、関係団体からの紹介、本プラットフォームの会員団体からの推薦等といった間接的アプローチ

③事務局機能の整備（体制整備）

- 本プラットフォームの設立と JRI・SDRC の運営サポート

③ 3年目事業の概要

3年目事業は「他地域展開・連携づくり期間」と位置づけた。実践活動については、過去3年間の日野町でのフィールドワークをもとに、新たなフィールドである山梨県市川三郷町においてプロジェクトを実施した。さらに、プラットフォーム形成に向けた関係機関との関係構築のための各種アンケート調査・訪問ヒアリング調査・情報交換等を実施した。

【3年目の事業「他地域展開・連携づくり期間」】

(i) 市川三郷町での「わがまち魅力化プロジェクト」実施

日野町での実践をベースにパッケージ化した「わがまち魅力化プロジェクト」を、新しいフィールドである山梨県市川三郷町において実施した。

○テーマ設定：日野町に比して、多様な地域資源を有する一方、合併前の旧町単位（3地区）を超えた連携が薄い状況が見られたため、学生の視点で3地区それぞれの魅力をうまく融合させ「市川三郷町の魅力」として発信するにはどうすればよいか、を考えるようなテーマ設定を行った。

(ii) 全国的な情報ネットワーク化に向けた連携づくり

上記(i)のプロジェクトを地域外にも発信するためのイベントを実施するとともに、今後の地方創生に向けて核となる金融機関や地域のシンクタンクとの情報交換を行った。プロジェクトの趣旨に共感する組織・個人は集まってきたため、「共感」から「参画」へ結びつける仕組みづくりのための関係構築を進めた。

2. 山梨県市川三郷町でのフィールドワーク

(1) 市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトの活動概要

① 目的

都市部と地方の大学生が市川三郷町に滞在し、町民や事業者等との交流やフィールドワークを通じて、地域の魅力や課題を考える。

【企画意図】

- ・大学生のアイデアを市川三郷町の魅力化や地域おこしに役立てる。
- ・参加学生にとって、過疎地域の問題や田舎の環境に直に触れる経験、住民との交流や他大学の学生との交流など成長機会となる。
- ・都市部や他地域の若者とつながりができ、今後も地域おこしをはじめ様々な連携が期待できる。

② 実施主体

主催：市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクト実行委員会

協力：市川三郷町、東京富士大学 企業ビジネス研究同好会（顧問：渡辺泰宏准教授）、
一般社団法人 I G O コミュニケーションズ、一般財団法人日本総合研究所

③ 参加者

合計 10 名（5 大学／男性 6 名、女性 4 名）

東京富士大学（学部生 3 名）、日本大学（学部生 4 名）、横浜国立大学（学部生 1 名）、青山学院大学（学部生 1 名）、慶應義塾大学（法学部 1 名）

④ 概要

- ・2016 年から 2018 年までは鳥取県日野町において「日野町魅力化プロジェクト」として大学の夏季休暇中に実施。大学生約 10 名がチームに分かれて町の魅力や課題を調べ、最終日に報告会を実施し事業化アイデアを提案するプロジェクト。2016 年度と 2017 年度については、「産業」「観光」「生活」のテーマごとにチームを作り、それぞれのテーマに沿ってフィールドワークとプランの提案を行った。2018 年度には、全チーム共通で、農業をテーマの主軸として、産業活性化、交流人口や観光客の増加策を検討した。
- ・2019 年度は、日野町での過去 3 年間の実践をベースとしながら、市川三郷町の地域特性を踏まえてプログラムをカスタマイズし、プロジェクトを企画・実施した。

- ・実施フィールドの検討と決定にあたっては、まず鳥取県日野町での継続実施（周辺自治体との共同実施含む）、難しい場合には鳥取県と連携し同県内の他地域での実施をする方針で検討を進めた。日野町での継続実施については、実施のための企画運営体制について町と調整がつかなかったため実現には至らなかった。鳥取県に向けては「とっとり魅力化プロジェクト（仮）」として県内の地域おこし協力隊等と連携する形で事業企画を提案したが、応募地域が出なかったため断念することとなった。

市川三郷町については、日野町魅力化プロジェクト報告会を東京で開催した際に、町役場担当者が関心を持ったことをきっかけに、企画提案をし実現に至ったものである。市川三郷町をフィールドとして決定した後も、プロジェクトの進捗や実施報告等は、鳥取県や日野町とも共有し、関係を継続している。

【参考データ】＊人口・世帯数・高齢化率は2019年4月1日現在

	鳥取県日野町	山梨県市川三郷町
人口	3,086 人	15,810 人
世帯数	1,346 世帯	6,682 世帯
高齢化率	48.6%	— ※2015 年国勢調査では、35.6%
面積	133.98 km ²	75.18 km ²
地域資源	金持(かもち)神社、日野川ラフティング、オシドリ（日野川へ飛来）、たたら製鉄、米、そば等	農業（大塚にんじん、甘々娘（とうもろこし）、和紙、手彫り印章、花火、歌舞伎文化、みたまの湯（温泉施設）等



【2019 年度「市川三郷町のっぴい魅力化プロジェクト」実施にあたっての主な変更点】

○新規のフィールドでの実施となり企画・準備期間が短期化したため、

ホームステイではなく町内の宿泊施設を利用することとした

フィールドの確定時期が 2019 年 5 月頃となり、実施までの期間が限られていたことから、ホームステイ先の調整が難しくなった。前年度まで、町民と生活を共にしながら学ぶこともプログラムの核としていたが、宿泊は町内の宿泊施設を利用することとし、交流会等の形で町民と接する機会を別途設ける形とした。

○受入体制等への考慮から、短期集中プログラムとした（2泊3日間）。

通常は、最低でも 3 泊 4 日間の滞在としているが、受入体制や滞在費用への考慮から、2 泊 3 日間の滞在プログラムとした。短期間の滞在となる分、事前の説明・勉強会および事後の振り返り会を実施し参加学生へのフォローを行った。

○事前に地域側担当者へのヒアリングを実施したうえでテーマを設定した

地域側担当者へのヒアリングにおいて、町に多様な資源（農業・印章産業・和紙製造業・花火等）があることや、地区ごとの地域特性を把握した。そのうえで、初年度の実施であることも踏まえ、これまでのように「観光」「農業」といった分野ごとにチームを分ける形式ではなく、参加者全員が町の多様な資源を把握したうえで、ブランディングを考える共通テーマを設定した。

【テーマ】市川三郷町ブランドを考えよう

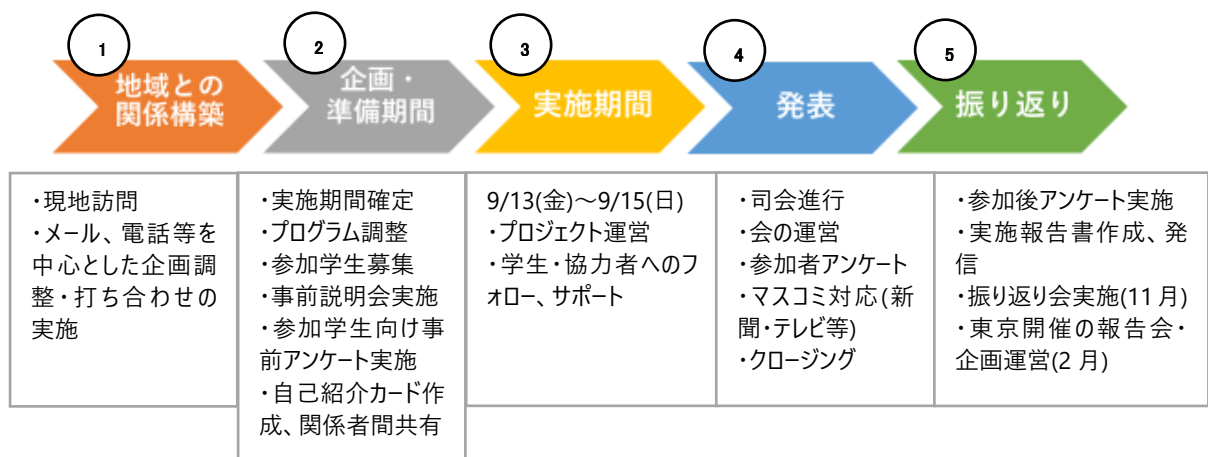
あなた達は、市川三郷町の地域商社の社長と社員です。町には、様々な資源があるにも関わらず、まだあまり知られていない現状があります。地域商社として、市川三郷町ブランドを考え、提案してください。

* 火山灰が堆積してできたきめ細かく栄養分や水分を豊富に含んだ市川三郷町特有の肥沃な土質を「のっぴい」ということから、「市川三郷町のっぴい魅力化プロジェクト」として実施した。

(2) 実施内容

「わがまち魅力化プロジェクト」実施にあたっては、下図のようなプロセスで企画・コーディネートに参画した。以下①～⑤においてそれぞれのプロセスにおける実施内容を記載する。

図表 1. わがまち魅力化プロジェクトの実施プロセス



① 地域、各機関との関係構築、企画調整

ー現地（市川三郷町）との企画調整

フィールドワーク実施の約2か月前にプロジェクトの実施方針、企画概要の調整のため、町を訪問、町役場、協力者等と打ち合わせを実施した。

ー関係機関との企画調整、情報共有

実施主体となる東京富士大学、参加学生募集にあたり協力いただく横浜国立大学等と打ち合わせを実施。山梨県庁（総合政策部 地域創生・人口対策課、東京事務所）にもプロジェクト実施について事前に情報共有を図った。

② 企画・準備期間

（a）参加学生募集

実施体制（移動手段・宿泊等）の都合により参加定員は10名とし、参加費はかからないが、現地までの往復交通費は学生負担として募集を行った。

東京富士大学および日本大学については、渡辺泰宏准教授のご紹介により学生を募集、その他、幅広い大学からの参加を募るため、横浜国立大学の小林誉明准教授からも募集に協力いただき、同大学、慶應義塾大学、青山学院大学の学生から応募があった。

参加学生の属性

学年	男性	女性	合計	大学名	男性	女性	合計
1年生	0	0	0	東京富士大学	2	1	3
2年生	1	1	2	日本大学	1	3	4
3年生	2	3	5	慶應義塾大学	1	0	1
4年生	3	0	3	青山学院大学	1	0	1
合計	6	4	10	横浜国立大学	1	0	1
				合計	6	4	10

（b）事前ワークショップ（9月上旬に複数回に分けて実施、各1時間程度）

参加学生を対象とした事前説明・ワークショップの機会を設けた。

ー限られたプロジェクト期間の中では、学生同士のチームワークが求められることから、事前ワークショップの機会を活用して、お互いを知ることができるよう学生同士が話すセッションを設定。参加できなかった学生にも共有できるよう、顔写真と自己紹介カードを作成、関係者間で事前に共有した。

ー学生が町に関する情報収集や事前調査を進められるよう、地域を見るとき視点のレクチャーするとともに、参考資料を配布した。

(c) 事前アンケート

参加学生の事前準備状況やプロジェクトへの参加意欲を把握するために、事前アンケートをWEB上で実施した。全学生がプロジェクトを通した達成目標を持ったうえで、それぞれの関心に基づいて事前準備をして参加するようにフォローアップを行った。

1. プロジェクト参加にあたり、事前に準備した内容

項目	人数	割合
①参加学生のプロフィール	10	100.0
②市川三郷町の人口・地域資源等	6	60.0
③市川三郷町の農業・観光・伝統工芸等	9	90.0
④市川三郷町を含む広範なエリアの情報	3	30.0
⑤全国の地方創生・地域活性化の取組	5	50.0
⑥テーマに取り組むにあたってのスキル習得	1	10.0

2. プロジェクトを通して達成したいこと・目標

○町民とのコミュニケーション

- ・最低 5 名の事業者の方々にインタビューし、住民が地域創生において具体的には何を望んでいるのか知りたい
- ・プロジェクト中に町民 20 名以上に、データだけでは分からない町の現状についてインタビューする
- ・町民の方 20 名以上に町の魅力・課題についてインタビューし、自分が見つけた町の良いところについても伝える

○地方創生プランの検討

- ・他の地域では真似ができないプランを 3 つ以上考える
- ・移住者が増えるきっかけを 5 つ見つける
- ・市川三郷町が持つ資源を 15 個以上探して、資源を組み合わせたり、他の地域特性と連動させたりするようなブランド発見につながる方法論を 10 以上考えていく

参加学生全員が、町の住民に聞きたいことや、町への提案に向けて具体的な目標を持って参加した。データやインターネットの情報では分からないことを、現地で獲得しようという意欲が高かった。

3. 市川三郷町に関係するテーマの中で最も関心が高いもの

項目	人数	割合
①農業	1	10.0
②伝統工芸(花火・印章・和紙)	6	60.0
③観光・交流	3	30.0
④移住定住	0	0.0
⑤その他	0	0.0

市川三郷町ならではのテーマ(伝統工芸)への関心が高い学生が最も多かった。「伝統工芸」を選択しながらも、具体的に話を聞きたい内容に挙げた学生は 2 名だったため、普段接点がない未知の分野であることから関心が高かったことも考えられる。

4. 「この方にこんな話を聞いてみたい」ということ

○住民

- ・移住者へ市川三郷町に移住した理由を聞きたい
- ・市川三郷町に住む若い方に、住んでいるうえでの良い点・悪い点を聞きたい
- ・他地域からの移住者の方に、住み始めて気づいた町の魅力と課題を聞きたい

○伝統工芸関係者

- ・職人の方に、(商品の)ウリにしている点を聞きたい
- ・伝統工芸関係者の方に、後継者の見通しや将来性に関する話を聞きたい

○農業

- ・農業関係者に対し、農作物のマーケティングについて聞きたい(例：特産物を海外の消費者にもアピールしているか)

○その他

- ・観光客がいれば、観光に訪れた理由を聞きたい

住民や移住者に対して、町の生活面での魅力や課題を聞きたいという学生が多かった。町を知る上で、町民の生の声を大切にしている学生が多いことがうかがえる。

5. 現段階で「市川三郷町の魅力」だと感じている点

○観光資源

- ・山梨県最大級の花火大会
- ・旧街道の町並み、歌舞伎の市川團十郎ゆかりの地である点

○伝統工芸・伝統芸能

- ・一部であってもどこかに刺さるポテンシャルを持つ伝統工芸

○農業

- ・市川三郷町でしか収穫できない特産物(人参など)

○その他

- ・自然が豊かで風情がある
- ・地域づくりに関して、住民のことを考え貢献したいという思いが強い

事前説明会や、配布資料などの情報から、町がPRしている魅力(花火大会、伝統工芸、農作物等)を挙げる学生がほとんどだった。「地域づくりに関して、住民のことを考え貢献したいという思いが強い」と回答した学生は、情報源が不明ではあるが、それぞれの学生なりに関心のある点から、事前に町のことを調べていた。

6. 現段階で「市川三郷町の課題」だと感じている点

○人口減少(若者の減少、人口減少、移住の点で環境があまり整っていない点等)

○ブランディング、広報(ブランドの活用について、差別化が弱いと感じられる点等)

○その他(地域の産業の後継者不足等)

プロジェクトでのテーマ(「市川三郷町ブランド」)を事前に伝えており、町のブランディングについて事前に確認している学生も見受けられた。事前に魅力と課題の両面を深掘して考える準備を促すことも今後必要と考えられる。

③ プロジェクト実施期間

以下のようなプログラムで、9月13日(金)から9月15日(日)までの2泊3日でプロジェクトを実施した。

図表2. 市川三郷町のっぴい魅力化プロジェクトのプログラム

日	時	内容
9月13日 (金)	13:00 ~13:20	市川三郷町役場(本庁舎) 集合 ⇒オリエンテーション(@役場本庁舎 大会議室)
	13:50 ~14:50	印章づくり体験・ヒアリング(@六郷町民会館)
	15:30 ~16:30	小学校見学&ふれあい囲碁(@市川東小学校)
	17:15 ~19:00	食事・入浴(@みたまの湯、みはらし亭)
	19:30	水明荘到着 ⇒花火、翌日(ヒアリング等) 準備
9月14日 (土)	8:20	朝食後、水明荘出発
	9:00 ~10:10	【フィールドワーク】 ○農業の現状を知る シャインマスカット収穫体験、農協共撰所 ヒアリング
	10:40 ~11:40	○観光・移住の現状を知る 古民家(畑熊)・役場担当課
	12:00 ~12:50	昼食(@ニューポート)
	13:00 ~13:50	○伝統工芸を知る 機械和紙の工場見学・ヒアリング(@金長特殊製紙)
	14:00 ~14:20	花火屋タチカワ(@はなびかん) 花火についてヒアリング
	14:30 ~15:00	«まちブラ»碑林公園から役場本庁舎まで縦断まち歩き (旧街道の街並み、関所、史跡、神社仏閣等)
	15:00 ~16:50	【グループディスカッション】@役場本庁舎 大会議室 ◎学びの共有 ◎ビジネスプラン作成
	17:00 ~17:50	入浴(@みたまの湯) ⇒農泊・ちかはぎ空の家へ移動
	18:10 ~19:10	夕食(@農泊・ちかはぎ空の家) ⇒食事後、片付け・交流会準備
	19:30 ~21:00	交流会(@空の家) ※プロジェクトご協力者や周辺住民の方々も参集 学生と地域の方とのふれあいの機会を創出
9月15日 (日)	21:00頃	解散
	8:00	朝食後、プレゼン会場へ移動
	9:00 ~10:30	プレゼン大会(@市川東小学校体育館)
	10:30 ~11:00	マスコミ取材対応(@市川東小学校体育館)
	12:00	昼食(@イルポッジョ)
	13:00	振り返り会(@イルポッジョ)
	14:00	振り返り会后、歌舞伎文化資料館へ移動 ⇒見学後、自由解散(甲斐上野駅から乗車)
	15:00	終了

④ 発表

(a) 発表内容

プロジェクト最終日には広く地元住民等にも参加していただく形での発表会を開催した。学生からのプレゼンテーション内容は以下のとおり。

◆ Aチーム（チーム名：のっぴい株式会社）

テーマ 「日本一の産業／技術／伝統／熱い思い 職人の町 市川三郷町」

○提案内容：市川三郷職人街

- ・中央通りの商店街に、市川三郷の伝統産業を集める
- ・1産業1体験工房の形で、空き家・空き店舗をリノベーションする
- ・一カ所で様々な職人と伝統に触れ合える

◆ Bチーム（チーム名：株式会社 YOROKOBI）

テーマ 「山と伝統文化の『悦び』の町」

○提案内容：市川三郷町芸術祭

- ・日本の自然・伝統文化を捉えなおす観光型総合芸術祭
- ・地域の資源を活用した芸術作品をアーティストに制作してもらう
- ・一定期間、作品を町一帯に点在させ、周遊してもらう

◆ Cチーム（チーム名：のっぴい産業）

テーマ 「クセが強い町、市川三郷町」

○提案内容：観光ツアーによる個々の資源の一元化と、町内の一体化の醸成

- ・大学生や高校生向けの体験型スタディツアーにより、外部の若者と住民の交流を生み、刺激を与えあう
- ・シニア向け伝統工芸体験ツアーを行いシニアの強い人脈による、町の魅力の発信と浸透をねらう
- ・3地区が一丸となり、町全体のブランドを発信する

(b) プレゼン大会参加者の声

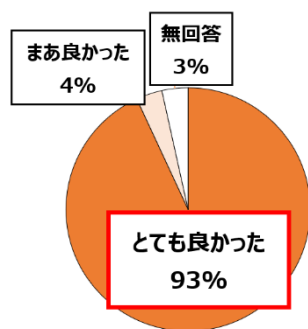
プロジェクト最終日のプレゼン大会には約 40 名が参加され、そのうち 29 名の方からアンケートの回答を得ることができた。

○回答者の年代・性別

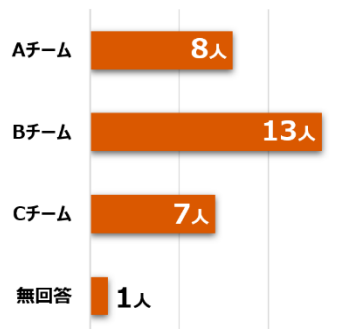
		性別			合計
		男性	女性	—	
年代	20代	2	1		3
	30代	9	1		10
	40代	7	1		8
	50代	1	1		2
	60代	3	1		4
	—	—	—	2	2
合計		22	5	2	29

プロジェクトのご協力者を含め、住民、町役場職員、県庁職員等、幅広い方々が大学生の活動に関心を持って、プレゼン大会に参加し、学生のプレゼンテーションに対し感想や質問が伝えられた。

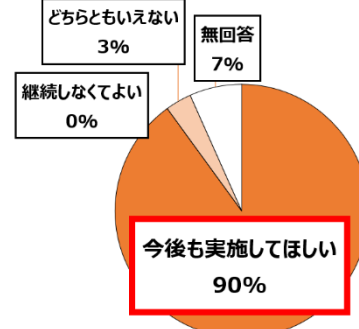
○プレゼン大会の印象



○内容が最も分かりやすかったチーム



○今後の実施について



プレゼン大会に対する印象としては、学生たちの真剣なプレゼンへの評価が高く、「とても良かった」という回答が93%であった（「あまり良くなかった」「悪かった」は0%）。各チームのプレゼンに対する評価としては、「甲乙つけがたい発表だったが、特にBチームが分かりやすい、実現に近いと感じた」という回答が多かった。今後の実施に対する意見としては、「若い視点をもっとまちづくりに生かしたい」という声が多く、90%の方が「今後も実施してほしい」と回答した。

来場者の感想から

- ・自分の住んでいる足元しか見えていないので、若い外部の人からの視点で見いだせることが多くあることを教えていただきました。
- ・町の問題を真剣に考えてくれていることが伝わってきました。
- ・3日間という短時間でよく課題を見つけ出したと驚いています。
- ・現在の市川三郷町の問題をしっかりと捉えており、非常に有意義でした。
- ・学生さんたちと交流することで刺激を受け、企業としてもさらに頑張ろうと、気持ちが強くなりました。

プロジェクトでの学生発表内容と感想、参加者の感想等を記載した総括ペーパーを作成し、終了直後に町役場、協力者の皆様へ御礼を伝えけるとともに、報告を行った。

実施報告書(24 ページ)およびダイジェスト版(4 ページ)については、学生や関係者等からの原稿作成の協力を得て、約1か月後に発行した。



⑤振り返り

(a) 学生向け参加後アンケート

プロジェクト終了後に、学生自身の率直な感想を把握するとともに、自身の成長や変化を振り返ることを目的として参加後アンケートを実施した。

1. 印象に残っているプログラム

項目	1 番 (3pt)	2 番 (2pt)	3 番 (1pt)	ポイント	備考
農泊・ちかはぎ空の家	6	2	0	22	1 位
プレゼン大会	1	1	3	8	2 位
水明荘	1	1	1	6	3 位
移動販売・星野商店	0	2	2	6	3 位

2. 各プログラムについて、印象に残った理由

◆ 1 位：農泊・ちかはぎ空の家

- ・地域の方から面白い話をたくさん聞かせてもらった。大量生産の物(の品質)は手作り(の品質の高さ)には絶対かなわないと、ほとんどの人が口をそろえて言っていた点が最も印象的だった
- ・町民の方々と深い話ができて、仕事に対する熱い想いや市川三郷町の魅力を知ることができた。空の家の温かさを感じ、また行きたいと強く思った
- ・2日間の中で関係を築いた方々と同じ空間で話し合うことができ、町の未来について考えることができた

◆ 2 位：プレゼン大会

- ・学生の発表に対して、町民の方々から意見をいただけたことが嬉しかった
- ・役場の人だけでなく、町民の方々も真剣に聞いてくれてよかった

◆ 3 位：水明荘

- ・朝の四尾連湖が美しかった。一日目の夜は少し余裕があり、他の学生と話を刺激を受けた
- ・国産の花火を実際に体験して、質の高さを実感した
- ・メンバー全員で、今まで見たことがない花火を満喫できた

◆ 3 位：移動販売・星野商店

- ・2、3軒しかない集落に住んでいる、車を使えない高齢者の方たちに買い物を楽しんでもらいたいという願いが素晴らしいと思った
- ・星野さんと秋山さんの話を聞き、実際どのような工夫をして地方創生(地域活性化)をしているのか聞くことができた
- ・プロジェクトの発表準備から本番もたくさんの質問をしていただき、熱心に耳を傾けてくださり、ディスカッションを通して大変有意義な時間を過ごせた
- ・過疎地域の現状と課題を知ることができた
- ・買い物難民という言葉は耳にしたことはあったが、その実態をよく理解できていなかった。今回、山間地域の集落に足を運んで身をもって理解できた

◆ その他

○みたまの湯

- ・地域資源として魅力的だと思った
- ・夜景が想像以上に素晴らしく、参加学生とも交流できた

○印章づくり体験

- ・手彫りは彫った人の癖が出るから、面白かった

○市川東小学校

- ・若い世代との交流ができたうえで、町の好きなところをしっかりと持っていることが確認できた

プログラム数が10以上と多かったこともあり、1位の「農泊ちかはぎ空の家(交流会・宿泊等)」以外は、票が分散した。空の家での交流会では、事業者や近隣住民の方々が参加され、印象に残る深い話をすることができていた。プレゼン大会や、グループワークでは、地域で移動販売をしている星野氏や来場者の町民の方々から、(学生の提案や発言に対し)前向きなフィードバックをいただけたことが、学生の気づきにつながっていた。その他のプログラムについても、現地で実際に五感で体験することでの発見が多くあったことがうかがえた。

3-1. うまくいったこと・成長したと思うこと

○自己発見

- ・人とのつながりやグループワークを通して、自分の足りないところが分かり、自分の成長につなげたいと思えた
- ・自分の信念や考え、学んでいることをうまく言葉にできず勿体ないことをしてしまったが、そのことに気づくことができた

○コミュニケーション力

- ・空の家での地域の方とのコミュニケーションのとき、自分が興味のある話もうまく引き出すことができた
- ・町の方との会話の中から、地域の課題を見出すことができた
- ・町民の方に自ら積極的に話しかけ、お会いした方全員と一度は話すことができたため、コミュニケーション面で成長できたと思う

○チームワーク

- ・3地域が合体してできた町である点を指摘したプラン設計をチームでうまく連携して作ることができた。前回と比べて成長したと感じる
- ・研究内容・大学・学年などバックグラウンドが異なるなか、最初は意見交換をどうすればよいか戸惑ったが、意見を一度受け入れてみんなで吟味することができ、良い雰囲気アイデアを考えることができた

○視野の拡大

- ・多くの町民の方、他大学の学生たちと話す機会があり、非常に良い刺激を受けた。様々な業界で活躍する方々の話を聞くことで視野が広がった。

○提案力

- ・事前の勉強で芸術関係に興味をもち、今回それを生かしたプランを考えることができた

現地の町民の方や、他大学の学生との交流・コミュニケーションが常に求められるプログラムであったため、コミュニケーション力やチームワークの向上を成長した点として挙げる学生が多かった。また、プログラムを通して自分の強み・弱みの発見につながったという感想もあった。この質問項目に対して「視野の拡大・価値観の変化」を挙げた学生は1名だったが、「印象に残った理由」の項目で実際に足を運んで現地を見たことによる気づきを挙げる学生も多くいたため、実際には大半の学生にとって、新たな価値観を得る成長機会になっていたと考えられる。

3-2. もっとこうすれば良かったと思うこと

○住民とのコミュニケーション

- ・地域住民の日常生活について調べ、考えをふくらませるよう準備がしなかった
- ・住民に質問するときに、深層まで聞くことができなかった
- ・ビジネスプランを考案する際に必要となる情報を想定したうえで、町民の方々に質問できればよかった

○グループワーク

- ・グループワークで社長（リーダー）をやらせてもらったが、もっと自信を持てば良かった
- ・低学年が話しやすい雰囲気を作るべきだった
- ・2回目の参加だったので、前回の学びからチーム内での立ち回りを意識したが自己主張が弱かった
- ・1日目の時点である程度アイデアの大枠を固め、2日目以降そのアイデアを磨けるような質問をできたらよかった
- ・より実現可能な提案をすべき立場だったのに、少し妥協してしまった

町民とのコミュニケーションについては、もっと生活面のことや、町の実態・課題の深い部分についても聞けると良かったという回答があった。町民との交流機会はあったものの、事業者として話を聞くことが多く、あまり生活面まで踏み込めなかった可能性もある。一般住民の方から話を聞く機会としては、ホームステイがベストだが、次回に向けては手法に検討の余地がある。グループワークでの反省点を挙げる学生もいたが、どのチームも個々の学生のバランスを考慮しながら編成したこともあり、チームワークの面で問題のあるチームは無かったと思われる。個々人の役割における反省点は、今後の大学生活や社会人生活において生かせることも多かった。

4. その他

- ・内容が豊富でフィールドワークが充実していたが、まち歩き時間が短く、町で暮らす人たちの意見をくみ取ることができなかった。時間配分に余裕を持った形だと有難い
- ・コンテンツは魅力的だったが、スケジュールがタイトすぎた
- ・宿泊先や移動中など、いろんな場面で町民の方と触れ合う機会があって良かった。今回は観光面で様々な場所を訪れたけれど、実際の生活面(買物・交通)についても知ることができれば良かった

- ・ハードなスケジュールだったため、1つ1つをもう少し深く見たかった残念さがある。自由行動も短くなってしまったので、もう少しゆとりのあるプランだと良かった

余裕のないタイムスケジュールは、次年度に向けた反省点。一般の町民との接点づくり、町民の生活面への理解を深められるような機会も設けられるとよい。

5. 実際に訪れて感じた「市川三郷町の魅力」

○地域資源

- ・歴史の深い産業が多い
- ・ギネス記録の判子、日本一の経験がある花火大会、特殊な土壌で育った特産品など、様々な魅力ある資源
- ・身近に感じられるような見学・体験は実際にやってみてとても楽しかったので、もっと多くの人に知ってほしい
- ・3地域が合体したことで輝かしい資源が豊富にあること、それぞれに実績があること

○人、コミュニティ

- ・みたまの湯（温泉施設）のように常に人々が集まれるコミュニティがあること
- ・塩島さんのように地方創生に非常に熱心な方に会えたこと
- ・過疎地域と聞くと町民の表情が暗いと思っていたが、実際は表情は明るく、自分たちの仕事に誇りを持っている人たちだった

○自然

- ・自然と寄り添った生活に魅力を感じた

事前アンケートでは見られなかった町の魅力を挙げる学生が大半だった。特に、人やコミュニティについては、実際に現地の方々との交流を通して感じた魅力が大きかったことがうかがえた。

6. 実際に訪れて感じた「市川三郷町の課題」

○交通手段

- ・自家用車がないと外出が厳しい、車がないと生活が成り立たない
- ・魅力ある資源をつなぐ交通手段やイベントがない
- ・観光する際の移動が不便、観光地間で山道が多く、距離が遠い
- ・各施設への誘導(案内)が少ないように感じた

○その他

- ・合併後の横のつながり
- ・地域商社のような個別の地域資源をつなげ発信する存在がないこと

プログラム構成として地場産業や観光に関する要素が濃く、「人口減少・高齢化」から生じている具体的な事象・生活課題までを参加学生たちが知ることは難しかった。移動手段の問題や、地域資源が点在している不便さなどは、日野町のプロジェクト時も学生から挙げられていた課題だった。過疎・人口減少地域においては、地域課題はほとんど共通しているため、(理想のまちの姿・ビジョンを描きながら)どのように魅力的な資源に光を当てて、それらをいかにコーディネートするかが他地域との差別化のために重要と考えられる。

(b) 振り返りワークショップ (2019 年 11 月 10 日(日)実施)

魅力化プロジェクトについての学生視点での改善点、学生自身が今後の町との関わり方を考える機会を設けるため、振り返りワークショップを実施した。当日は、都合のつかなかった1名を除き9名が参加し、町からの実行委員メンバーが参加され、プロジェクト後に再び場を設定することで今後の学生と地域、学生同士の関係継続の一步にもなっていた。プロジェクト終了後も、プロジェクトでの経験や町との出会いを次につなげている学生がほとんどであることが分かり、プロジェクト内でのプレゼン内容について、全体で振り返ることを通して、改めて他のチームの良い点に気づくことができていた。

(1)プロジェクト実施後の2か月間のGOOD & NEW(何か良かったこと・新しい発見があったこと)

- ・自身が提案した芸術祭について、他の地域の芸術祭にも足を運び学びを深めた。
- ・プレゼンの経験が、サークル活動に生かされている
- ・プロジェクト後、町の協力者の方と東京で会う機会をつくった。自分の実印をつくるため、六郷のはんこ職人さんと連絡を取り合っている
- ・録画を撮りためていたテレビ番組を見ていたら、神明の花火のことを取り上げていた。参加していなかったら関心を持たずに流していたかもしれない。旅行会社のインターンで観光と地方創生について考え、市川三郷町での経験を生かすことができた
- ・サークルの新しい活動や文化祭の準備など、市川三郷町で様々な人と関わったことで新しいことに自信をもって取り組めるようになった

(2)プレゼン内容の振り返りとブラッシュアップ

- ・他のチームのプレゼン内容に対して、それぞれの学生が「良かった点」を多く挙げられており、お互いに良い刺激を与えあう場とすることができた。
- ・結果的には、時間的制約もあり、「ブラッシュアップ内容」はあまり具体的な内容ではなかった。

(3)市川三郷町のためにできること、したいこと

- ・自分の就職活動に生かしたい、仕事選びにもつなげたい
- ・市川三郷町の産品を購入するなどして応援したい
- ・町の農業ボランティアをしたい
- ・プロジェクトを通して知り合った町の方ともっと交流を深めたい



(c) 東京での報告会開催

本プロジェクトについて、首都圏在住または首都圏勤務の社会人・学生等から評価をいただくとともに、参加学生にとっては町との関係継続、自身の経験を第三者に向けて伝えることによる成長の機会とするため、東京での報告会を企画、実施した。

◆ 開催概要

テーマ：大学生が中心となった地方創生

～市川三郷町のつばい魅力化プロジェクト報告会～

日 時：2020年2月18日（水）

場 所：3×3 Lab Future

（東京都千代田区大手町1-1-2 大手門タワー・JXビル1階）

主 催：一般財団法人日本総合研究所

共 催：エコツツェリア協会

協 力：東京富士大学 企業ビジネス研究同好会

◆ 参加者数 36名（プロジェクト参加学生8名含む）

◆ プログラム

- ・市川三郷町の魅力紹介(市川三郷町 農林課 係長 塩島実)
- ・プロジェクト参加学生からのプレゼン
(東京富士大学 磯野祐也・一條華穂・山田拓海、横浜国立大学 渡邊武瑠)
- ・わがまち魅力化プロジェクト一経緯と今後の展開―(一般財団法人日本総合研究所)
- ・ワークショップ
テーマ：大塚にんじんのインパクトある売り出し方とは
- ・感想・アンケート記入
- ・交流会

《参加者内訳》

		男性	女性	合計	
				人	%
社会人	大学生	7	6	13	36.1
	公務員	9	3	12	33.3
	会社員	5	1	6	16.7
	教員	3	0	3	8.3
	その他	1	1	2	5.6
合計		25	11	36	100.0

当日は、プロジェクト参加学生とプロジェクトに関心のある大学生、全国の地方公務員、地域貢献活動等に関心のある民間企業社員の方など36名が参加。参加者は、市川三郷町という町名も聞いたことがなかった人が半数以上であり、本イベントを機に、町について知り関心を持つ契機にもなっていた（29 ページ・参考資料1 参照）。

《イベント案内チラシ》



本イベントで得られた第三者視点からの評価としては、主に以下のような意見が得られた。

- ・若くて柔軟な視点、外部からの視点を得られることは地域にとって意義のあるプロジェクトだと思う。また、学生の報告から、学生たちにとっても今後につながる良い経験になっていることが伝わってきた。
- ・「地域を外から見る」、「世代を超えて考える」、など地域内外・世代を問わず一緒にプロジェクトを創るような仕掛けがある点が効果的だと感じた。
- ・プロジェクト前後のフォローもすることで、いつのイベントではなく、継続的な取組につながっている。一方で、いかに地元住民の意識を保てるかも重要ではないか。
- ・このプロジェクトを機に、地元住民がどのような気づきを得て、住民自身がいかに地域づくりをしていくかが重要。



参加学生自身からは、参加後に以下のような感想が聞かれ、プロジェクトから約4か月後に改めて社会人等に向けてプレゼンテーションをする機会を通じて、それぞれが新しい発見を得ていた。

- ・学生にとっても、地元の方にとっても、お互いの視点を共有することは大切だと改めて感じた。
- ・社会人の方々のご意見を聞くことで、学生では思いつかないような意見も聞くことができる貴重な機会だった。
- ・多様な人が集まることでさらに多くのアイデアが生まれ、町にとってもいい刺激につながると感じた。
- ・社会人の方と意見を交わすことができ、非常に貴重な経験ができた。



この場の設定には、学生にとっての成長機会、学生と町の関係継続、町に関心をもつ人口の増加（町にとってのメリット）の大きく3つの意味を持たせており、会場の協力も得ることでいずれの目的も達成することができた。

(3) 2019 年度プロジェクト企画における成果、今後に向けた課題

①成果

(a) 運営面から

市川三郷町での「わがまち魅力化プロジェクト」は、地域側もこれまで同様のプロジェクトを実施した経験はなかった。さらには、それまでの3か年実施してきた鳥取県日野町とは、大きく異なる特性も持ち合わせた地域であった。しかし、弊所と東京富士大学が主として企画・運営してきた鳥取県日野町でのノウハウをベースとして、町からの情報提供も受けて、町の特性に合わせた企画・運営を実現することができた。このことは本プロジェクトの骨格となるサービスパッケージができた証であり、今後、他の地域へ展開していくための基盤とすることができたといえる。

(b) 市川三郷町にとって―「よそ者・若者」との交流による町の変化―

町にとって、本プロジェクトは下記の3点を獲得する機会となっていた。

- ✓ 若者と直接交流することや若者視点からの提案を受ける刺激
- ✓ 町外との関係づくりのきっかけ
- ✓ 地元の魅力を再認識する機会

(c) 学生にとって―現地での目的意識を持った行動による学生自身の成長―

参加学生全員が、プロジェクト参加により「成長したと思う」と回答した。その背景を学生アンケート結果から考察すると、以下の3要素があると考えられる(14 ページ・学生向け参加後アンケート参照)。

- ✓ 地域の方々との出会い・コミュニケーション
 - ・市川東小学校の生徒との交流では、地元の子どもたちが町の好きなところをしっかりと持っていることが確認できた(都市部の地域性との相違点や共通点の発見)
 - ・交流会で町民の方と深い話ができ、仕事に対する熱い想いや町の魅力を知ることができた(地域ならではの仕事の魅力)
- ✓ 地域ならではの体験・経験からの気づき
 - ・朝の四尾連湖の景色が写真以上に美しかった
 - ・国産の花火を体験して、質の高さを実感した
- ✓ チームワーク、プレゼンの実践機会
 - ・初めて会う学生同士のチームだったが、数日間のうちにコミュニケーションを密にとり、お互いのことを知りながら、協力して、町に向けた提案をつくりあげることができた
 - ・プレゼンは緊張したが、町民の皆様から前向きな感想・意見をいただけて嬉しかった

* 学生アンケート結果から

学生が地域に一定期間滞在する本プロジェクトだからこそできる「首都圏大学生と現地の人との交流（子どもから高齢者まで）」「自然の体験」「体験での気づきに関するアウトプットと意見交換」により、町と学生の関係性を構築するとともに、前後のフォローアップと掛け合わせることで、その関係を深めていくことに寄与することができた。

②今後に向けた課題

これまで、本プロジェクトは、JRI・SDRC の自主研究事業として運営し、日野町での実施の際には、地域おこし協力隊の協力、鳥取県および日野町から補助をいただきながら実施してきた。今後の本プロジェクトの持続的な運営と全国各地への展開に向けては、地域内外の多様なステークホルダーとの連携が必要不可欠である。

ここでは、次年度以降の「市川三郷町のっぴい魅力化プロジェクト」継続実施に向けての課題に特化して記載したい。

（a）プロジェクト協力人材確保の必要性

今年度のプロジェクト運営にあたっては、JRI 事務局がコーディネーター役を担うと同時に、現地でのアテンド補助やプロジェクト中の学生フォロー等、あらゆる役割をこなす必要があった。今後のより安全で持続的な運営のためには、プロジェクト協力人材を集めていくことが課題の 1 つとして挙げられる。そのために、下記のような具体策を検討している。

ー参加学生 OBOG 等への協力呼びかけ

プロジェクトのコンセプトを理解した OBOG は、すでに就職して社会人となった人も多くいるが、卒業後もプロジェクトの情報共有を継続して行っている。OBOG の協力は、現役の参加学生にとっては先輩の経験を知ることでの知見の獲得とアウトプットの質の向上につながるとともに、OBOG 自身にとっても自らの経験・学びを言語化して後輩に伝える機会となり、双方にとって有益である。

ー首都圏在住・在勤の（若手）社会人等への協力呼びかけ（ボランティア、プロボノ）

近年では、本プロジェクトのような地方創生プロジェクトに、現役世代の社会人がボランティアやプロボノとして参加する機会も増えてきている。本プロジェクトは「地方創生に向けた次世代の育成」を主軸としているため、現役世代の中でも比較的若い 20 代、30 代をターゲットとしながら、企業で得られたスキル・知識を地方創生のために活用する形式での参画方法も追加することを検討したい。

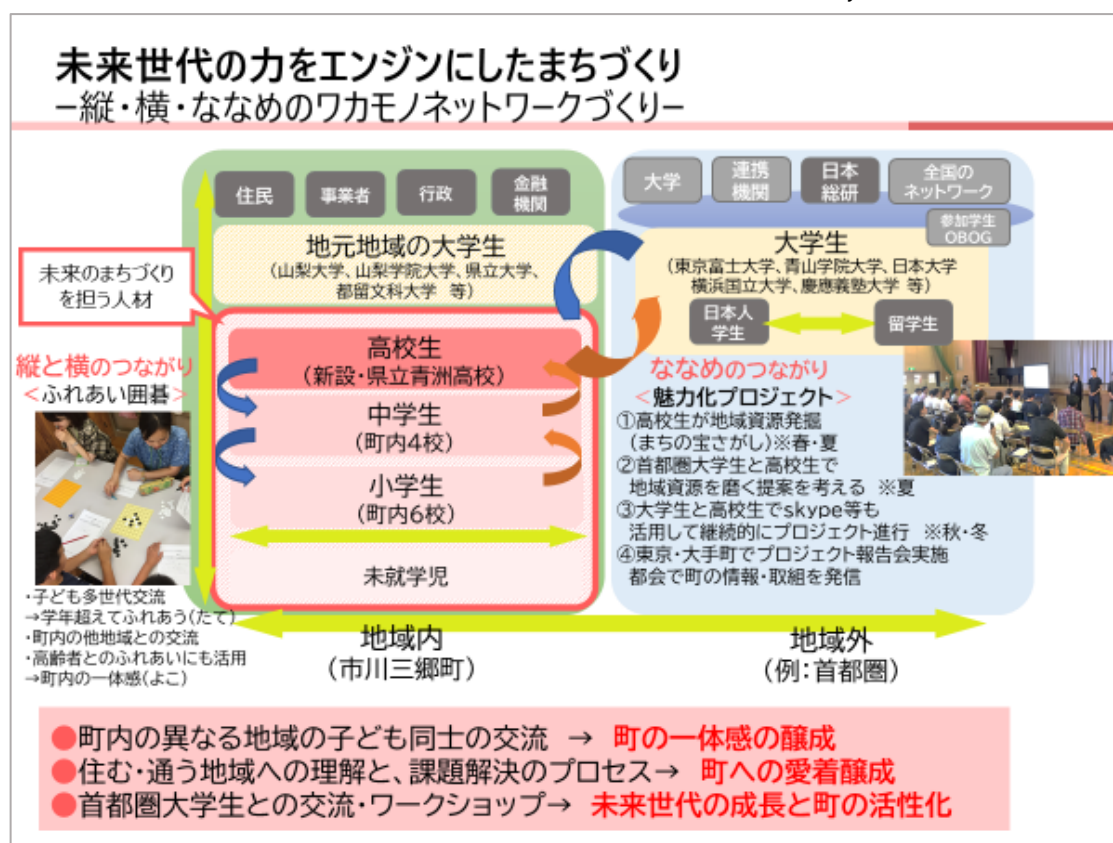
（b）高校との連携

今後の地域活性化・地域魅力化策を創っていくためには、首都圏大学生のような地域外の若者のアイデアだけではなく、地域内の若者の想いや考えを吸い上げ、融合していくことが求められる。今年度のプロジェクトでは、町内にある全校生徒 10 名の小学校の生徒たちと

の交流機会を設定したが、次年度以降はより年齢の近い高校生とのコラボレーションも含めた企画を立案し、町と地元高校へ提案する方針である。

提案の背景にあるのは、2019年に山梨総合研究所が町内に所在する市川高校の高校生に向けて行ったアンケート調査によって「市川三郷町に誇り・愛着を持っている生徒が全学年平均で約8割」という結果がある（33ページ・「参考2.市川高校アンケート結果」参照）。調査結果の詳細を見ると、学年が上がるにつれて、その割合が高まる傾向があることもわかった。全国的に「高校の魅力化を通じた地方創生」の取組が進められているところであり、市川三郷町においても高校・高校生が果たす役割は大きい。地域で過ごす時間が長い高校生にしか分からない町の魅力があると考えられ、地域外の若者との交流・対話によって、高校生自身の町に対する誇りや愛着をより高めることもできるだろう。また、市川高校、峡南高校、増穂商業高校の3校の再編整備により2020年4月に、県立青洲高等学校が開校する。地域との連携も強化される方針があることから、本プロジェクトによる相乗効果を埋めるような企画提案を行うこととする。

目指す姿～未来世代の力をエンジンにしたまちづくり～（JRI作成）



(c) 企業や関係団体等との連携

地方創生に向けては、地元企業・事業者が自社の利益・顧客にとってのメリットだけではなく、地域社会全体に利益をもたらすような意識を持ち経営することも重要である。そのような観点から、今年度のプロジェクトにおいては、町商工会や町内事業者等の多くの方々の協力も得ることができた。また、今後の運営について、一部の事業者から資金面での協力も得られることとなっている。

ただ、今後の地域産業振興に向けては、一つの町だけでは経営資源も限られるため、広域での連携体制を構築することも求められ、それは行政としての経営や地方創生についても同様である。今後は県内に所在する大企業・中堅企業とも連携を図りながら、より持続可能な実施体制としていくことが課題といえる。

3. 全国的な情報ネットワーキングに向けて

「わがまち魅力化プロジェクト」の持続的・発展的实施に向けては、東京に所在するシンクタンクとして効果的に首都圏を中心に情報発信をしていくとともに、全国の関係団体等から地域の最先端の情報を収集し整理・再発信する役割も求められている。

実践活動としての「わがまち魅力化プロジェクト」を核としながら、全国的な情報ネットワーキングに向けて実施した内容を下記に大きく2点記載する。

(1) 東京大手町「3×3 Lab Future」を拠点とした全国との連携

① 「3×3 Lab Future」の概要

「3×3 Lab Future(サンサン・ラボ・フューチャー)」は、一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協議会(通称エコツェリア協会、以下エコツェリア協会という。)*が運営する「次世代の持続可能な社会の実現」を目指す業種業態の垣根を超えた交流・活動拠点である。

*一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協議会(エコツェリア協会):

地球規模の環境問題に都市として対応すべき様々な「環境共生型まちづくり」の取組を推進する団体として2007年に設立された。東京千代田区にある、大手町・丸の内・有楽町の3地区(大丸有エリア)内外の連携や協働、横断的な産学連携を促進しながら、環境共生型のまちづくりに貢献する事業を推進・支援する公益的な法人。大丸有エリアにかかわる地権者、ビルオーナー、立地企業、立地店舗、就業者、行政、インフラ事業者、来街者などの人々が有機的に連携し形成されたコミュニティを基盤としている。

拠点の機能としては、地域に開かれたオープンスクール・セミナー等の開催により、国内外の来街者・就業者間の交流・啓発に貢献する「交流・啓発機能」をはじめ、新たな環境ビジネスの萌芽となる技術・情報・データ等を集積する「ラボラトリー機能」、大丸有地区全体の最先端の取組を可視化・情報発信し、世界に向けてアピールする「ショーケース機能」の3つを持ち合わせている。なかでも「交流・啓発機能」においては、「地方創生」をテーマに各地域の現状や課題について理解を深め、自治体・中小企業・NPOなど、地域に関わる様々な人と都心の企業・ビジネスパーソンが連携するプロジェクトやイベント等が数多く開催されている。

(以下、イベント例を参照)

参考 イベント例

- ・【丸の内 de 地方創生】北茨城市編～北茨城の食ブランドの創造～
都市×地方という視点で、地方がもつ魅力を広く伝える方策を考えるイベント。北茨城市の魅力をいかした食ブランドの創造を目指し、新商品開発を進める飲食・物販店によるプレゼン・試食等も交えて、参加者からの感想を集めブランディングに活用する
(2020年2月10日(月)開催)

*参照：エコツェリア協会ホームページ

② プロジェクト報告会・交流会を通じた連携の広がりや深まり

「わがまち魅力化プロジェクト」の趣旨についてエコツェリア協会から賛同を得られたことにより、2017 年度以降毎年、この場を活用してプロジェクト報告会を共催している。今年度実施した報告会においては、東北地方から九州・沖縄地方まで、全国の地方公務員（中央省庁・東京事務所・民間企業等へ派遣されている方々）が参加者の約 3 分の 1 を占め、本プロジェクトの取組を普及する機会となると同時に、交流会を通じて実践フィールドの地域と全国地域との交流機会ともなっていた。このことは、エコツェリア協会が、上記①で記したとおり「地方創生」分野についても力を入れて普及・啓発機能を果たしてきたことによる、関心の高い層へのアプローチ力と、長年の実績により蓄積してきたイベント企画・交流促進のノウハウが参加者の満足度を高めていることも大きく影響していると考えられる。

今後、JRI が地方創生に係る情報ネットワークを進展させていくにあたっては、「わがまち魅力化プロジェクト」フィールドにおいて継続的な実践・生きた情報の収集、地域内関係主体との連携構築をするだけでなく、全国的な情報発信・普及および都市部の民間企業・ビジネスパーソン等との連携も不可欠であり、エコツェリア協会と継続的な連携が望まれる。

（２）地域金融機関や地域シンクタンクとの情報交換

① 地方創生における地域金融機関の役割

2015 年、国として掲げられた「まち・ひと・しごと創生（地方創生）」の推進にあたっては、協働の形として「産官学」にとどまらず、「金（金融機関）」にも期待される役割を提示してスタートした。本事業の推進にあたっては、各地域の地方創生に向けて、それぞれの地域の金融機関（地銀・信用金庫等）の役割の大きさを認識しながら、どのようなビジョンを持ち、どのような具体的アクションを起こしているかに着目した。また、各地域金融機関が母体となることが多い地域シンクタンクについても、取組状況を把握するとともに、調査の実施、情報交換等を行った。

ここでは、地方創生に向けて金融機関が役割を果たすことが求められる社会的要請と、各機関で収集されている取組事例について概観する。

・社会的要請：金融機関の持つ知見の活用

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部資料「『まち・ひと・しごと創生』と金融機関の役割について」（2015 年 5 月）によると、地方創生に向けた内閣官房から金融機関への協力依頼として以下のようなことが挙げられている。

(1) 地方版総合戦略の策定への協力

⇒ 地方自治体からの要請等を踏まえ、策定プロセス（前段階としての現状・将来分析を含む）に積極的に参画し、金融機関が持つ知見などに基づく情報提供・分析・提案等の協力を行う。

(2) 国の総合戦略や地方版総合戦略の実施に向けた協力

⇒ 産官学金労の連携の下、総合戦略等における各個別施策について、金融機関が持つ知見等を活かし積極的に発揮する。

(3) 地域における金融機能の高度化に向けた取り組み

⇒ 特に、地域資源を活用した事業化、生産性の向上、再出発に向けた環境整備等の課題について、様々なライフステージにある企業の経営課題の解決に向けた自主的な取組を官民一体で支援していく観点から、地域経済活性化支援機構（REVIC）との連携や、政府系金融機関との協働案件の発掘・組成を通じたノウハウシェアなどの連携を通じて、地域における金融機能の高度化を図っていく。

* 参考

「まち・ひと・しごと創生」と金融機関の役割について(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部,2015年5月)

・金融機関による地方創生に関する取組

◆ 一般社団法人全国銀行協会「当協会会員における地方創生に関する取組事例に係るアンケート調査結果」（2020年2月27日）

本会では、地方創生をSDGsの主な取組項目の一つに掲げ、中長期的に地域活性化に向けて会員銀行の積極的な取組推進を図っており、その一環として会員銀行の地方創生に関する取組事例のアンケート調査等を実施、HP上で公表している。

参考 URL：https://www.zenginkyo.or.jp/fileadmin/res/abstract/efforts/contribution/sousei/sousei_202002.pdf

◆ 一般社団法人全国地方銀行協会

「地方銀行は、これまで地域金融の中核的な担い手として、地域産業の競争力強化やお客様の新たな挑戦に対するサポート等、地域の活性化に向けた取組を進めてきており、「今後も、金融サービスの提供とコンサルティング機能の発揮を通じて、地域の経済社会の発展に貢献する」としたうえで、2015年の段階で地方銀行の「地域密着型金融」の取組状況のとりまとめを行っている。

1. 地方版まち・ひと・しごと創生総合戦略への積極的な参画

- ・地方創生の推進のため、専門組織を立ち上げるなど行内態勢を整備。また、地方銀行間の地域を超えたネットワークも活用。
- ・地元の地方公共団体における地方版総合戦略の策定を支援。地方銀行64行合計で、全国1,765の都道府県・市町村のうち、1,152の地方公共団体における総合戦略の策定に関与（平成27年7月末）。

2. 地方創生に向けた具体的な取組み

- ・ローカルブランド力の向上のため、産官学と連携し、特色ある地域資源を活かした新商品の開発や販路開拓等を支援。

② 全国の地域金融機関、地域シンクタンクとの関係づくり

本事業においては、上記のような金融機関、特にプロジェクト実践フィールドに所在する地域金融機関と情報交換を行うとともに、全国の地域シンクタンク（45 社）との関係づくりを進めてきた。具体的な実施内容は下記の 3 点である。ただし、本ネットワークに関しては、クローズドコミュニティとして情報共有・展開・深化を図っていくこととしているため、本報告書には個別の名称等は記載しないこととする。

○アンケート調査の実施

2017 年度から 2018 年度にかけて、「地方創生・地域活性化・地域魅力化」に関する取組事例収集のためのアンケート調査を実施。全国各地の地域密着型シンクタンクから地域での先進的かつ実践的な取組を収集し、JRI がとりまとめを行ったうえで再度ネットワーク内において情報を共有化した。

○ヒアリング調査の実施

収集事例のなかから、全国の地域シンクタンクの関心度が特に高かった事例のなかから、産業振興、観光振興、コミュニティ維持・再生等の各分野から偏りがでないように訪問先を選定し、現地に赴いてヒアリング調査を実施した。本調査についてもレポートをとりまとめ、ネットワーク内での情報展開をしている（メーリングリストを活用）。（2018 年度・2019 年度）

○わがまち魅力化プロジェクトの実践に関する情報展開

わがまち魅力化プロジェクトの実践については、プロジェクトの実施報告書の郵送、プロジェクト報告会の案内と終了後レポートの共有をするなど、随時情報発信を行っている。

今後も関係づくりを進めるとともに、地域シンクタンク側の課題やニーズ等も把握し、その課題解決のための提案をしていくコンサルティング機能も果たしていく。

4. 総括

(1) 3年間の実践によって得られた関係性と知見

「わがまち魅力化プロジェクト」については、プロジェクトとしては2016年度に開始して4年間、JRIは2017年度から参画し3か年の実践を経たこととなる。これまでの実践について、ポイントを整理すると以下の表のようになる。

わがまち魅力化プロジェクト4年間の実践経過

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
各年度の展開におけるポイント	地方創生・人材育成の理念のもとプロジェクトの開始	・JRIがコーディネート役として参画し試行的に運営 ・地域おこし協力隊が核となる形での企画・運営体制づくりを確立	・基本プログラムのパッケージ化 ・関係大学と参加学生の多様化 ・参加学生が実際に起業した実績	・他地域への展開を実践 ・地域特性に応じたプログラムのカスタマイズ ・地元地域の事業者への協力依頼を強化
参加大学	東京富士大学 島根大学 鳥取大学	東京富士大学 島根大学	東京富士大学 横浜国立大学 青山学院大学 フェリス学院大学 島根大学	東京富士大学 日本大学 横浜国立大学 慶應義塾大学 青山学院大学
コーディネート	東京富士大学 黒田教授(当時)	JRI	JRI	JRI
	全国の関係団体とのつながりづくり(地域活性化センター、地域シンクタンク、各都道府県東京事務所等)			
フィールド	鳥取県日野町	鳥取県日野町	鳥取県日野町	山梨県市川三郷町
地域関係	鳥取県	鳥取県	鳥取県 * 地域金融機関、 地元新聞社、ケー ブルテレビとも 情報交換	山梨県 * 地域金融機関、 地域シンクタン ク、地元新聞社と も情報交換

上記の表に記載のとおり、2016年度に開始した本プロジェクトは、2017年度にJRIがコーディネート役として参画、試行的に運営ながらも、地元地域では地域おこし協力隊が核となる形での企画・運営体制を構築することができた。2018年度には、3年目を迎えて基本プログラムをパッケージ化するとともに、参加大学を拡げ、より多様な大学生が参加することが可能になった。さらに、そのなかの1名が実際に地域資源を活用したビジネスを起業する実績も生まれた(日野町魅力化プロジェクトにおいては、学生の提案10件のうち5件が

実現された)。2019年度には、実践フィールドを鳥取県日野町から山梨県市川三郷町へと展開し、ベースのプログラムに地域特性に応じたカスタマイズを加えて企画・運営することができた。また、伝統産業や農業も盛んであることから、住民だけではなく、地元の事業者の協力も得ながら地域産業の魅力を伝えるプログラムを実施することができた。

3年間の実践から、大学との関係、地域との関係、全国の関係機関との関係において今後の基礎を固めてきた。大学との関係については、参加学生募集にあたってのネットワークをつくるとともに、募集や学生向けフォローアップのノウハウを蓄積した。現在は1年度に1地域の実施としているため、今後、地域拡大をしていくための体制については課題が残っている。次に、地域との関係については、プロジェクト実施にあたり関係構築すべきステークホルダーの共通点を把握することができた。また、フィールドワーク等の実践活動を通じて、実践地域と密にコミュニケーションをとらなければ理解することが難しい地方創生に向けた壁・課題を認識することができた（地域内での「人間関係」に起因する課題、合併前の旧町村単位での関係性に起因する課題等）。これらの課題についての解決策の提示も、残された課題である。最後に全国の関係機関との関係においては、表中にも記載のとおり、地域活性化センター、各都道府県東京事務所、地域シンクタンク、エコツツェリア協会等、プロジェクトの積み重ねを通じて、「共感の輪」を広げることができたといえる。

今後のプロジェクト運営に向けては、プロジェクトの提供価値の向上とともに、持続可能な運営のための体制整備についての課題があり、解決に向けたアクションについては次項で記載することとしたい。

（２）ビジョン実現に向けて今後求められるアクション

本プロジェクトの継続的实践を通して目指してきたことは、持続可能で活力のある多様な地域社会を創生していくことであり、そのためには次世代を担う若者の発想・行動力が不可欠であることから、都市部の若者が地方に一定期間滞在して魅力・課題を考えるプロジェクト設計と運営を行うと同時に、地域と若者のつなぎ役としてのシンクタンクの役割を果たすための体制づくりを検討してきた。

本プロジェクトは、「地方創生のための人づくり、チームづくり」に貢献する事業であり、そのことが提供価値である。対象となる「人」は首都圏の若者（大学生）であり、地域のコーディネーターであり、地域住民たちであった。また、一人の「人」では成し遂げることはできず、それが「スーパーマン」のような存在であったとしてもそれは持続的な取組にはならない。持続可能な地域づくりのためには「人」を育てるとともに、協力しあう体制「チーム」をつくる必要がある。その点においても、本プロジェクトは決して一人の若者や、一人のコーディネーターだけで実施できるものではないことから、「チームづくり」にも寄与する事業となっていた。

本プロジェクトを通して、ビジョン実現のために提供価値をより高めていくことと、持続可能な運営のための体制整備面で、解決すべき課題が残っている。課題解決のためのアクションを下記に提示して総括としたい。

①プロジェクトの提供価値向上のために

「地方創生のための人づくり・チームづくり」を進展させていくために、「特定フィールドでの活動」と「全国ベースでの事業」を両輪で展開していく必要がある。

ー特定フィールドでの活動

「わがまち魅力化プロジェクト」について、山梨県市川三郷町という特定のフィールドで継続実施し、深化させていく。人材育成にあたっては、多様な対象が存在するが、まずは当初から想定していた「首都圏の若者・大学生たち」の育成に注力する。これまでの実践活動を踏まえると、「都会の価値観」だけではなく、地方部についても関心を持ち、実際に現地で体験をし、共に考える人材を育てていくことが、東京一極集中の流れの変化・地方創生への流れを生み出す一歩となると考える。

今後は、地域と若者の関係のきっかけを生み、継続させることから、関係の質をより高めていくようなプログラムづくりをしていく。

ー全国ベースでの事業展開（プラットフォーム化）

既述のとおり、全国的な情報ネットワークングに向けた動きを今後も実施していき、まずは地域金融機関・地域シンクタンクを核とした情報網を形成し、勉強会や課題検討の場、研修機会等を設定していくことを検討している。本事業が、人材と情報のプラットフォームとなることで、地域での具体的な課題解決・事業化に展開していくことを目指す。

②持続可能な運営体制整備のために

プロジェクトの持続可能な運営体制整備に向けては、人的資源・財政的資源の面で課題が残っている。

ー人的資源面での課題

4年間の実践により、賛同者・協力者を拡大していくことはできたが、今後の事業展開・拡大に向けては人員体制に課題がある。JRIで担うべき役割をコア業務に集中し、それ以外の部分について賛同者・協力者の力を借り、活用していけるようにするため、賛同者・協力者を組織化していく。

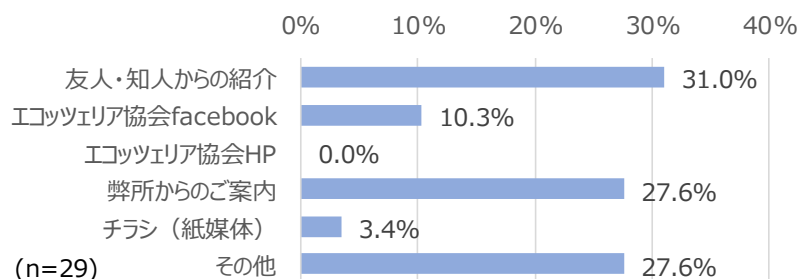
ー財政的資源面での課題

鳥取県日野町での3年間の実践期間については、鳥取県や日野町からの協力も得ながら、地域おこし協力隊との協働事業として実施してきた。市川三郷町での実践については、賛同者からの協力金を得られるようになったものの、持続的に運営できるだけの財政的資源ではない。プロジェクトに係る多様なステークホルダー（町役場、町内外の事

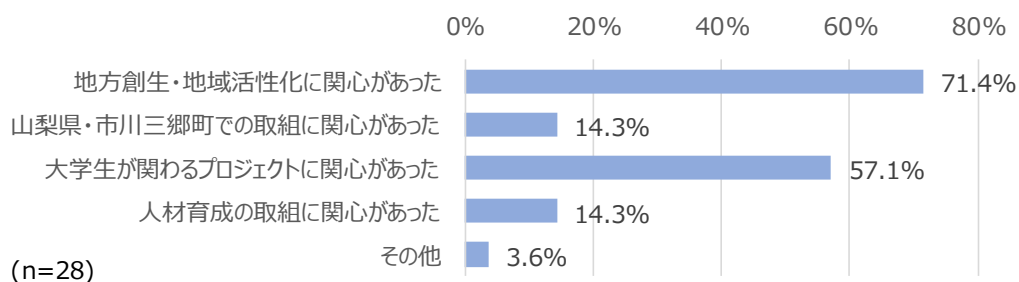
業者、町民、参加大学、その他）について、それぞれにとっての利益をより強く感じられるようなプロジェクトとしていくことが求められる。たとえば、参加大学生の地元事業者との連携強化（商品開発、販路開拓、インターンシップ等）、参加大学生の地域情報の発信力強化（SNS 等による発信、町広報への外部視点の活用等）など、地域にとってのインパクトを高めることで、より多くの資金調達につなげ、持続的な運営体制づくりを実現していく。

参考資料 1. 大学生が中心となった地方創生「市川三郷町のつばい魅力化プロジェクト」報告会
 - 参加者アンケート結果 -

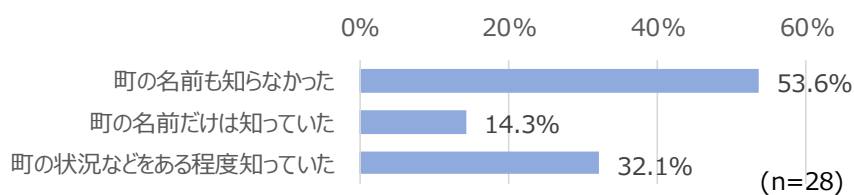
▶ Q1.本イベントを知ったきっかけ (SA)



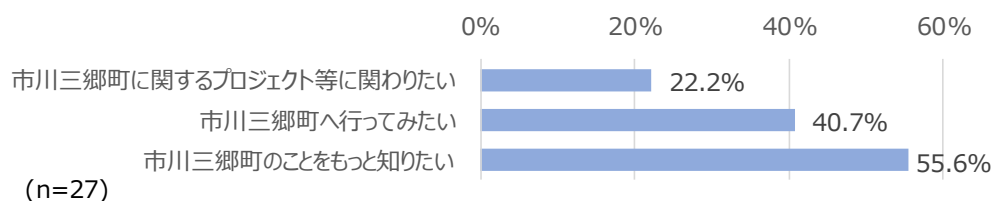
▶ Q2.本イベント参加の動機をお聞かせください (MA)



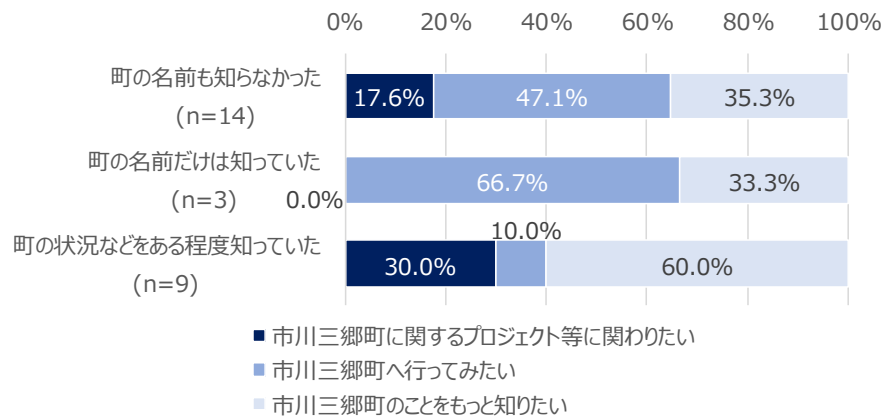
▶ Q3.山梨県市川三郷町について、イベント前からご存知でしたか (SA)



▶ Q4.イベント後、今のお気持ちに最も近いものをお聞かせください (MA)



【参考】Q3 イベント前の認知度×Q4 イベント後の気持ち



▶ Q5.本プロジェクトのように「学生が地方創生プロジェクトにチャレンジすること」に関して、ご意見・ご感想がありましたらお聞かせください (FA)

- ・学生の意見、考え方を取り入れることはとてもよい。〔公務員〕
- ・鳥取県内も、改めて本プロジェクトのフィールドとして活用していただけると幸いです。〔公務員〕
- ・若い頃に得られる体験はとても重要だと思います。私の時代にはなかったことです。〔公務員〕
- ・最近は学生が地方創生、あるいは地域課題について解決策を考えるという活動が増えてきたように思います。そういった活動自体が珍しくもないものになったので、どう学生、大人にインセンティブが出せるかというところが重要になってくるのかなと想像しています。〔公務員〕
- ・交流人口が増えるように、ホームステイ先がない場合は、ホテルとの交流ができるなど、工夫があったのか気になりました。〔公務員〕
- ・地域に目を向けてくれてうれしい！〔公務員〕
- ・若くて柔軟な視点、そして外からの視点は地域に必要不可欠。学生の皆さんにも非常に良い経験になったのではないかと思います。〔公務員〕
- ・面白かったです。〔公務員〕
- ・昨年も素晴らしいプロジェクトでしたが、今年はさらに一層充実したプロジェクトに成長、発展しているように感じました。より多くの学生たちが参画することで、実践的な取組をすることによって、地方創生とソリューションに携われたのは、大変貴重で意義深いチャレンジであったと思いました。〔教員〕
- ・学部から見た課題だけに基づいてプロジェクトを走らせるのではなく、内部の当事者が感じている課題を踏まえるとなお良いと思いました。でも、とにかくチャレンジしてみることはとても大切だと思います。〔教員〕
- ・色々な考えや意見が出て良いと思う。〔会社員〕
- ・いったん興味を持ってもらった学生をどうその興味を長く持ってもらうか。〔会社員〕
- ・意義があると思います。学生にとっても、地元の方にとっても、お互いの視点を共有する

ことは大切だと改めて感じました。〔学生〕

- ・これからの若い人々が担っていくので失敗してもどんどんチャレンジすることが大切であると思いました。〔学生〕
- ・途中参加でしたが、学生の皆さんが現地で考えてきた足跡をお聞きできて、非常に有意義な時間でした。〔学生〕
- ・今後も続けていってほしいです。ただ、継続しなければ意味がないのかな？と思ったので、プロジェクトから何か月後とかの様子も知りたいです。〔学生〕
- ・いかにその後のケアや地元住民の意識を保つかが重要だと感じた。〔学生〕
- ・学生自身が地域の課題に取り組んで考えることができる。学生を成長させるいい機会だと思います。〔その他〕
- ・本気で取り組むためには、時間と準備がもっと必要ではないか。初年度の取組ということであったが、準備のために現地に行く前に勉強が必要であると思う。〔その他〕

▶ Q6.ワークショップを通じて、“地方創生”や“地域魅力化”に関して改めて感じたことや考えたことがあれば教えてください（FA）

- ・学生の提案をその時だけに終わらずに、事業化の検討につなげていくことが大切。〔公務員〕
- ・例えば本プロジェクトのような取組で最も重要なことは、これを機に地元(住民)がどう意識を変え、いかに持続可能な地域づくりを行うか、ということだと感じました。〔公務員〕
- ・地方には都会とは異なる、なかなか解決困難な課題が多いと思います。〔公務員〕
- ・地域には課題がたくさんある中で、まちがどうなってほしいのか、プロジェクトの目的は何なのかなどをしっかりと整理した上で、地域に何ができるかを考える必要があると思いました。〔公務員〕
- ・幅広い世代からの話を聞くことで、新たな気づきを得ることができることを改めて認識することができた。〔公務員〕
- ・“外”から見る。“世代”をまたいで考えるなど、一緒に作っていく仕掛けがあって良かったです。〔公務員〕
- ・様々な年齢層の意見を聞く重要性を再認識しました。〔公務員〕
- ・“地方”、“地域”は魅力の宝庫。改めて自分の地元での取組に活かしたいと思います。〔公務員〕
- ・理論や思想ではなく、やはり実践ありきではないかと感じました。このプロジェクトを是非継続していただきたいと願っております。実践教育として大変有益であると考えております。〔教員〕
- ・人の数だけアイデアが出ることを実感しました。〔教員〕
- ・簡単ではないけども時間がかかるかも、一つ一つ積み上げていければよいと思います。〔会社員〕
- ・「発信」が大切ということ、逆に「発信」に頼らない形での伝え方はないのか？〔会社員〕
- ・課題設定の仕方での問題解決のアプローチが変わるということに改めて気づきました。〔会社員〕
- ・社会人の方々のご意見を聞くことで、学生では思いつかないような意見も聞くことができ

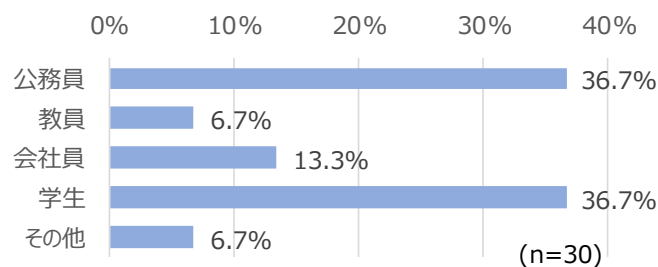
る貴重な機会で良かったと思いました。〔学生〕

- ・魅力を発信するためのマネジメントは難しく、しかし成果を出すためのビジネスモデルに今回良いものも出たのでとても面白かったです。〔学生〕
- ・細かく実情を理解することが重要であることを改めて感じた。〔学生〕
- ・魅力がありすぎてまとめられない、は最もだと思いました。〔学生〕
- ・まだまだ、できそうなことが多く見つかり、改善の余地が見えたので、今後に活かそうでした。〔学生〕
- ・自分の住んでいるところも町おこしが必要だと思った。〔学生〕
- ・人が多ければさらに多くのアイデアが生まれ、いい刺激につながると感じた。〔学生〕
- ・産教官民が一体となって全体で押し上げていくことが大切。〔その他〕

▶ Q7.その他、本イベントについてご感想等がありましたら自由にご記入ください（FA）

- ・他のまちでも実施してほしい。〔公務員〕
- ・大学生が地方のことを考えてくれる機会はとても貴重だと思いました。〔公務員〕
- ・今後とも是非続けてください!!〔公務員〕
- ・食べ物があって、会話も進みやすかったです。〔公務員〕
- ・地域デザイン学会にて議論されているテーマの一つに、「コンテンツ」創出ではなく「コンテクスト」に転換することの重要性を考察することも求められているので、参考にしてください。〔教員〕
- ・1年目なので、おおまかだったので、2年目以降は、より具体的にプランを作ってください(例 芸術祭の実施時期など)。〔会社員〕
- ・イベント参加前は町のことを何も知りませんでしたが、工芸品、食べ物、観光、様々な魅力があると感じました。まずは知っていただく機会を増やすことが大切に感じました。〔会社員〕
- ・社会人の方々と交流ができて非常に良かったと思います。ありがとうございました。〔学生〕
- ・社会人の方と意見を交わすことができ、非常に貴重な経験ができました。〔学生〕
- ・今年も来ていただいて貴重な意見を利かせていただきたいと思います。〔その他〕

▶ Q8.あなたのご職業（SA）



参考資料 2. 市川高校アンケート結果

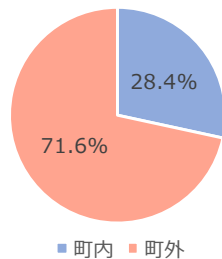
「調査概要 調査実施機関：山梨総合研究所」

調査目的	市川高校における市川三郷町の「誇り・愛着」を把握すること
調査対象	市川高校の生徒（全学年）
調査期間	2019年8月29～9月4日
調査方法	学校配布（配布数424） 回収数419（回収率98.8%）

1. 市川高校の生徒の居住地

- ・全学年に共通して、町外から通学している生徒が7割前後。

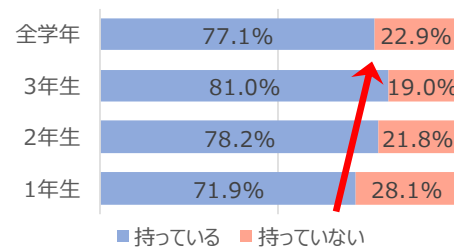
図1 居住地（全学年）



2. 市川三郷町への「誇り・愛着」

- Q.あなたは市川三郷町に「誇り・愛着」を持っていますか？
- ・「誇り・愛着」を持っている生徒は、全学年で8割。
 - ・学年が上がるにつれ、その割合が増加する傾向。

図2 町への誇り・愛着

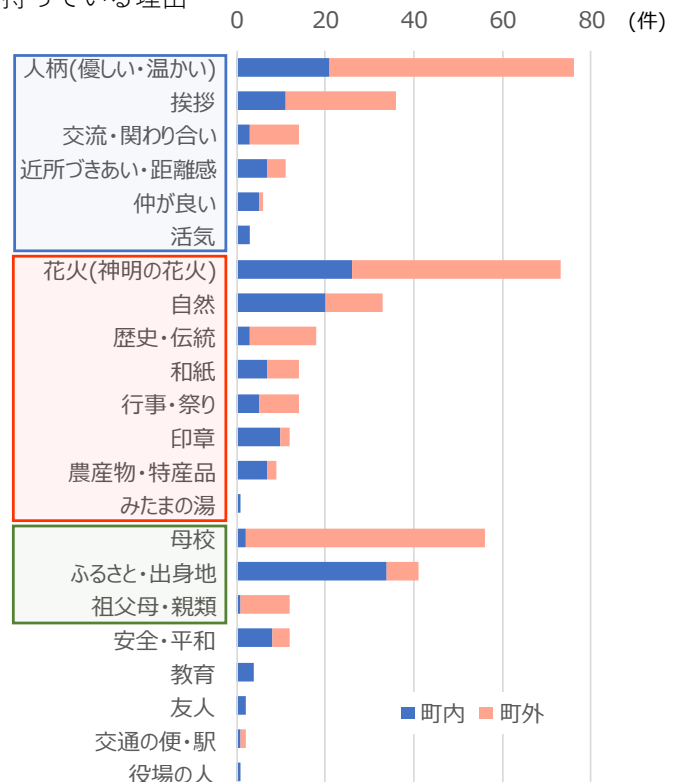


3. 市川三郷町に愛着を持っている理由（自由回答）

- ・自由記述内容から抽出したキーワードは、「人柄」や「挨拶」といった住民特性（ヒト）に関すること、「花火」や「自然」といった地域資源に関すること、「母校」や「ふるさと・出身地」といった郷土愛に関すること。

図3 誇り・愛着を持っている理由

	町内	町外	合計
人柄(優しい・温かい)	21	55	76
挨拶	11	25	36
交流・関わり合い	3	11	14
近所づきあい・距離感	7	4	11
仲が良い	5	1	6
活気	3		3
花火(神明の花火)	26	47	73
自然	20	13	33
歴史・伝統	3	15	18
和紙	7	7	14
行事・祭り	5	9	14
印章	10	2	12
農産物・特産品	7	2	9
みたまの湯	1		1
母校	2	54	56
ふるさと・出身地	34	7	41
祖父母・親類	1	11	12
安全・平和	8	4	12
教育	4		4
友人	2		2
交通の便・駅	1	1	2
役場の人	1		1
件数	182	268	450



4. 市川三郷町に愛着を持っていない理由（自由回答）

・全学年 419 人中 96 人が「誇り・愛着」を持っていない。うち、「誇り・愛着」を持っていない生徒の 9 割は、町外から通学。

「回答例」

- 市川三郷町に住んでいないからわからない(高校に通っているだけ)
- 市川三郷町のことをよく知らない
- 高校以外での関りが無い



せっかく3年間通うのに
もったいない
市川三郷町に興味・関心を持てらうには？

5. 市川三郷町に誇り・愛着を持てらうためのアイデア（自由回答）

Q.これから市川三郷町に生まれ育つ子どもが、市川三郷町に「誇り・愛着」を持つためには、どうしたらよいと思いますか？

「回答例」

- 挨拶をしたり、町の人と積極的にコミュニケーションをとる
- 市川三郷町の特産品や有名なもの、魅力をアピールする
- マスコットキャラクターを効果的に活用する
- (神明の花火大会等を中心に)地域のイベント、様々な人が参加できるイベントを増やす
- 市川三郷町にしかできない特別なイベントや若い人を対象としたイベントを企画・開催する
- 市川三郷町の豊かな自然を体感できる機会をつくる
- 伝統工芸に触れる機会をつくる
- 市川三郷町の特色を学ぶ授業を設ける(町民も参加できるようにする)
- 学校の授業で市川三郷の良いところを探してプレゼンする
- 学校の授業で地域の特産品を開発・販売するプログラムを設ける
- 市川三郷町の象徴である「高校」を発展させる
- 「市川三郷町といえば…」という、この町にしかない何かをつくる

- 郷土愛を育む学校の存在、地域における「高校」（小中学校）の価値
- 地域の学校と大学生とのコラボレーションによって、市川三郷町を魅力的に
- 市川三郷町のウリとは？若者ウケするものとは？



【資料作成】一般財団法人日本総合研究所 調査研究本部

※本資料は、「市川高校アンケート調査報告書（2019 年 10 月）」（公益財団法人山梨総合研究所）を基に弊所が作成したものである。

本プロジェクトにご関心のある方（もっと詳しく話を聞いてみたい／わが地域でも受け入れたい／一緒に活動したい など）は、下記担当者までご連絡ください。

【問合せ先】

一般財団法人日本総合研究所 調査研究本部

担当：内田誠一、黒田秀雄

〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 15 番 8 号 アークブランシェ四谷 3F

TEL：03-3351-7575（代） FAX：03-3351-7561

Email：uchida*jri.or.jp（＊を@に変更して下さい）

URL：https://www.jri.or.jp/

2019 年度 わがまち魅力化プロジェクト

～サステイナブルな地域社会の創生事業～ 事業報告書

発行日 2020 年 3 月

発行所 一般財団法人社会開発研究センター（SDRC）

一般財団法人日本総合研究所（JRI）

